

降水量の傾向と局地豪雨の関係

夏休みも近づき、旅行や水辺での遊びに最適の季節となりました。計画を立てている方にとっては天候が気になるところです。安定した晴天が続くことはありますが、夏から秋にかけては夕立など突然の雷雨や突風そして台風など、天気が不安定な時期でもあります。近年の月別降水量を比較してみます。

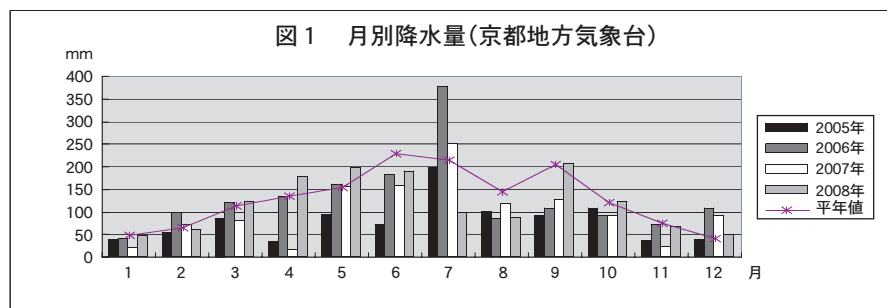
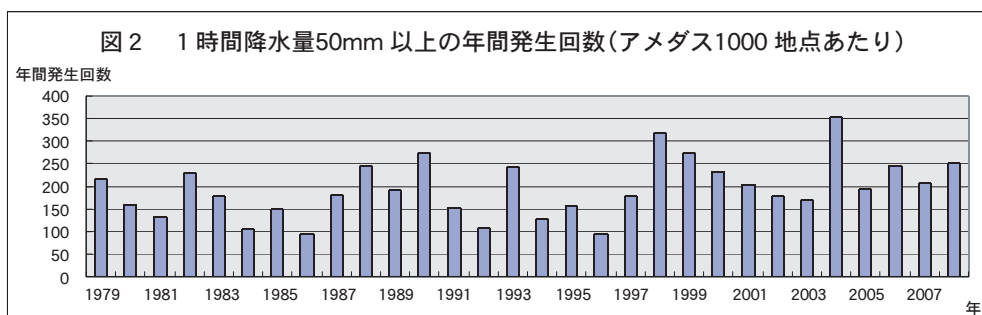


図1は気象庁のデータに基づく京都地方気象台の2005年から2008年の月別降水量です。1年間を通してみると2005年から3年連続で7月の降水量がもっとも多いという結果となっています。昨年は9月が一番多く降っています。平年値(1971年～2000年の平均)の降水量の傾向としては梅雨前線(6,7月)や秋雨前線(9月)の影響が目立ちますが、近年は変動が大きく降水量が安定していないようにみえます。

昨年は、局地的な豪雨により河川が一気に増水したケースが全国で多発しました。

図2は気象庁によるアメダス(1300地点のうち)全国1000地点あたりの1時間降水量50mm以上の年間発生回数を年ごとにグラフで表したものです。



ちなみに50mm/時間以上の降雨とは、「どしゃ降り」より上位ランクの「バケツをひっくり返したように降る」ことで、道路が川のような状態です。図2からは、大雨の頻度が徐々に増加しているのがわかります。1979年から1988年に年間平均で169回、1989年～1998年は同184回、1999年～2008年は同231回と発生回数が増え、年間平均を比較すると約1.4倍にはねあがっています。

激しい雨は大きな災害を引き起こすことがあります。レジャー・日常生活に関係なく、急な増水には注意が必要です。気象統計をみることで、日々のデータ蓄積による様々な傾向を知ることができます。

[数値は気象庁資料より]